

本当の平和

磯貝麻美

ゴーンゴーンという鐘の音がテレビの中から聞こえてくる。私は半分眠ったまま、黙禱をする……。これが今年の八月六日、八時十五分だ。

母の故郷が広島であるということもあって私の家では、八月六日原爆記念日の黙禱を、わりと熱心にする方だと思う。でも、私自身は年々いかにげになってきている。

平和を願っていないわけではない。ただ、平和の尊さ、ありがたさがだんだん分からなくなってきた。る。

戦争を実際に体験した語り部の人達も、いつかはみんな亡くなって誰

もいなくなってしまうだろう。そうなった時、みんなが戦争のことを忘れてしまいはしないだろうか。

私は六年生と中学三年生の修学旅行での語り部さん、そして私のおばあちゃん。という三人の被爆体験を聞いてきた。話は三人ともちがうけれど、どこかに共通点がある。戦争への憎しみ、平和への願いをどうにかして私達に伝えようとしている想い、そして話している時の目が同じだと感じた。悲しみ、憎しみ、つらい気持ち、そして喜び、希望など人間の感情が全て込められているようなそんな目だ。話したいはずがない

けど、話してくれたその想いに私は、応えなければならぬ。私だけが応えてもしかたがない。みんなが応えなければ意味がないのだ。戦争をして死にたくてしようがないなんていう人は、世界中を探しても、きっといないだろう。口で何を言ったって、死ぬのが怖くない人なんていないんだ。死ぬのがいやだから核爆弾を造り実験する。そして、それを見た人はまた怖くなって死ぬのがいやだから同じことをする。自分を死なせないためにしていることが、自分を殺そうとしていることに、なぜ分らないのだろうか。どうして自分は偉いと思えるのだろうか。何もせず他の人に喧嘩をしてもらっている弱虫のどこがえらいというのだろうか。

命の重さに差なんて無いのだ。誰が偉い、誰の命は重いなんて一体誰